

神奈川の道德

日本道德教育学会
神奈川 支部
令和7年1月19日発行
第 25 号

日本道德教育学会神奈川支部 研究大会 2024 12月21日(土)

國學院大學・ハイブリッド開催

2024年12月21日に國學院大學で、日本道德教育学会神奈川支部研究大会2024が行われました。今回は堀田竜次先生に「自己の生き方についての考えを深める道德教育の在り方」というテーマでご講演をいただきました。学習指導要領などに書かれているキーワード、今後の道德科の展望についてご教示いただきました。

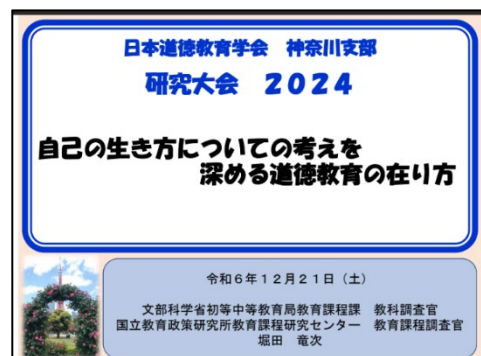
第一部【ご講演】「自己の生き方についての考えを深める道德教育の在り方」

文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官 堀田竜次先生

○テーマについて

- ・学習指導要領を見ると「自己の生き方についての考えを深める」ということについて次のようなキーワードが記載されている。
(小学校) 自分自身の問題、自分の特徴、伸ばしたい自己、思いや願い
(中学校) 人生の意味、いかによりよく生きる、存在価値生きる意味
(高等学校) 選択基準、判断理由、自己を深く見つめる
- ・総じて「自己の生き方に考ついての考えを深める」とは「自分自身を深く見つめる」道德科授業を考えていくことだともいえる。



○『学習指導要領の前文』と「令和答申の前文」より

- ・「ゆたかな人生を切り開き持続可能な未来のつくり手の育成」「そのための資質・能力の育成」「ICTの活用」が示されている。
- ・令和3年答申の前文には、「現行学習指導要領の着実な実施」が示されている。
- ・ICTが学校の授業を支える基盤として文房具化して活用することが示されているが、現場ではなかなか「文房具化」まではできていない。
- ・なぜICT機器は文房具されていないのか→「PCを開きなさい」「画面を見なさい」「振り返りを書きなさい」…こういう指示がどうしても必要である。他の文房具ではそういうことは起きない。
- ・定規やコンパスといった文房具と比べると、子どもたちが自分で考えて、活用を選択するフェーズにはまだ至っていないといえる。
- ・書くこと、調べることなど自分で「選択」できるようにしていけることが理想である。
- ・例えば、児童・生徒が自分で記入したものをスクリーンで示されることで話し合いはより充実していく。また教師もタブレット端末を見ながら、子どもの学習を見取り、その子に合った声掛けをしていく時代だといえる。

○文部科学省 道徳教育アーカイブの活用

- ・教育振興基本計画には道徳教育の推進充実が示されている。
- ・文部科学省が公開している「道徳教育アーカイブ」の授業動画も日々新しいものに更新されている。小学校、中学校も新しい授業動画が今後も更新されていく予定である。
- ・例えば最新アップされた授業動画では、導入時に事前アンケートを活用したり、タブレット端末を使って児童の考えをクラスで共有したりといった授業の実践例を見ることができる。
- ・タブレットを使った意見の交流や、アンケート機能の利用は小学校3年生ぐらいからであれば、その場で行うこともできる。

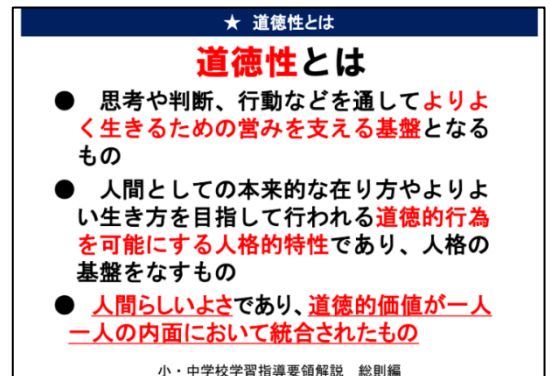


○改めて「道徳教育」とは何か

- ・道徳教育の目標として学習指導要領には「自立した人間として、他者と共に生きるための基盤となる道徳性を養うこと」が示されている。
- ・その道徳性の3つ目の説明に注目してみると次のようなことが書かれている。
- ・道徳的価値が一人ひとりの内面において統合されたもの、すなわち「人間らしいよさ」ともいえる。これは道徳科を学ぶにあたって大切にしてほしい部分である。
- ・自己の生き方を理解するためには「道徳科の特質」を考えていく必要がある。

○道徳科の特性とは何か

- ・特性…「独特の性質」「特に取り立てていえる特徴や性質」
 - ・特質…「性質そのものに本来備わっているもの」
- つまり「道徳科ならではの特徴・性質」という事ができる。
- ・学習指導要領解説には次のように書かれている。
道徳科は、内面的の資質としての道徳性を主体的に養っていく時間である。



○道徳科の学習の具体

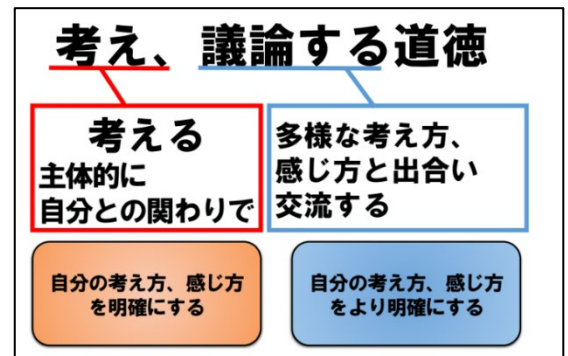
- ・そういった道徳性を養うためにどのような授業を講じていけばよいのだろうか。
- ・道徳の学習については解説の「教材」の部分に次のように書かれている。
「人生をいかに生きるべきか」「生き方の問いを考える」ということ
→教師がそのことを意識していないと、国語や特活の授業のように感じてしまう。
- ・「橋の上のおおかみ」も擬人化されているが、大切なのは、おおかみやウサギの「生き方」について考えることである。
- ・「よりよく生きたい」と考えている子どもたちに対して、教師はどのような立ち位置で接すべきか。
→共に考え、共に探究していく姿勢が必要だといえる。
- ・そのために「観念的な道徳」「押し付け道徳」にはならないようにしないといけない。
- ・道徳性の諸様相を育てる時間だといえる。

○「自己の人間としての生き方を深める学習」について

- ・現在は「質的転換」ではなく「質的充実」を目指すフェーズなのだといえる。
- ・個別最適な学び、協働的な学びの一体的な充実と言われているが、改めて現場の先生方は今まで自分たちがやってきた授業に自信をもってほしい。
- ・教材を多面的・多角的に考えることが、個別最適な学び、共働的な学びの一体的な充実につながるという。
- ・自己を見つめるための時間も必要である。

○「考え、議論する道徳」について

- ・学習について「考え、議論する道徳」は次のように捉えられる。
- ・考える→「自分の感じ方」「関わり方」を考えていく学び（これは主体的な学びといえる。）
- ・議論する→「多様な考え方」「多様な感じ方」と出会い交流することで自分の考えを明確にしていく。（これは対話的な学びといえる。）
- ・これらに関連付けることで「深い学び」になっていくと捉えることができる。

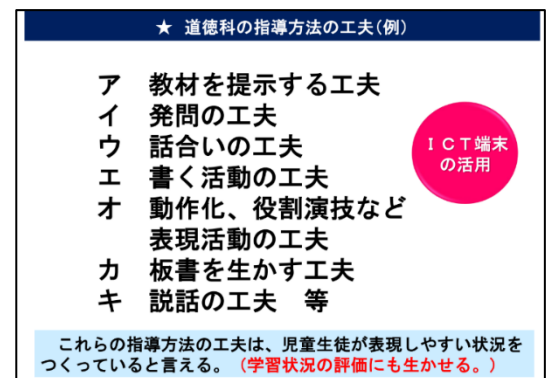


○教師の意図とは

- ・ねらいとする道徳的価値、児童生徒の実態、それを踏まえたうえで教材をどう扱っていくか。
- ・このような教師の意図がないと子供たちは「自己の生き方」についての考え方を深めることができない。
- ・先ほどのICT活用も、意図が明確でないと「画面に自分の考えを入力すること」が目的になってしまう。
- ・道徳科の真の目的は「道徳性を養うこと」である。
- ・諸様相である、判断力、心情、実践意欲を育てることである。

○授業を改善していく視点

- ・「自己の生き方についての考えを深める道徳教育」を実現するためには、「授業の視点」から見直していかないといけないと考える。
- ・先日行われた全国指導主事会で授業改善について様々な視点でレポートを書いてもらった各都道府県でどのようなことが授業における課題になっているかを話し合った。
- ・授業改善の課題として「目標に関わる部分」が課題としてどの県でも多く挙げられた。
- ・次に多かったのが「発問」と「児童の発言」について適切な反応をいかにするかという事である。
- ・これらを踏まえ、授業について「導入」「展開」「振り返り」三つの場面から考えてみる。



(導入の工夫)

- ・本時の主題に関わる問題意識を持たせる導入の工夫、教材の内容に関心を持たせる導入の工夫が必要である。
- ・例えば冒頭では、道徳アーカイブで紹介したような紹介した事前の実態調査や、リアルタイムでのアンケート機能の活用などが挙げられる。
- ・道徳アーカイブの動画の子どもの反応からも児童の反応の様子から、問題意識の高まりがうかがえる。
- ・ほかにも小学校低学年で教師による失敗談を例に、導入に関心をもってもらうことも有効だといえる。

（展開の工夫）

- ・教材に書かれている、道徳的価値について考える。
- ・多面的多角的に考える様にするために、教材に「関連する」道徳価値を子どもから出してもらう。
- ・板書で整理しながら、価値を多面的・多角的に考えられるようにする。
- ・映像の教材、読みもの教材など色々あるが、教材を手掛かりに様々な価値について考えさせたい。
- ・親切という価値に対しても、勇気と正直 誠実、友情等、多面的多角的に捉えることができる。
- ・板書を構造化していきながら、まだ出てきていない考えもないか子どもたちに考えてもらう。

（ふりかえりの工夫）

- ・自己を振り返ることができているかどうか重要になっていく。
- ・役割演技などを用いて、振り返ることもできる。児童の自覚を促す指導方法を工夫する。
- ・振り返りでは、道徳的価値について「自分との関り」でしっかりと考え、自己を深く見つめていける時間を確保していく。

.....

第二部【シンポジウム】

堀田先生の前半のご講演を聞いて考えたことについて堀田先生と4人の登壇者（本支部からは三ツ木会員、仲川会員、吉野会員、吉田会員）で「自己の生き方を深める道徳科教育の在り方」について意見交流をしていきました。（ここでは質疑応答の形式で紹介させていただきます。）

Q1 前半の堀田先生の講演を聞いて、感想や印象的だったキーワードなどありましたか？

（吉野会員）

- ・道徳性を養うという事をもう一度考えたい。
- ・道徳の「指導」の良し悪しではなく、子どもの「道徳性」が養われたかどうかという視点が大切であり、道徳科の「目標」について改めて注目していきたいと感じた。
- ・「考え、議論する道徳」に関しては、現場の子供たちを見ていると意見は言えるが、それを受け止めて次につなげていくことができているかが気になっている。
- ・「話し合い」が目的化しまわないように注意しないといけない。
- ・道徳科の一時間の授業で子どもの道徳性が深まるわけではない。授業の工夫はたくさんあったが、日常生活の道徳教育もどうするかということも考ええてきたい。

（吉田会員）

- ・講演中の「人生をいかに生きるか」という言葉がシンプルだけど奥が深いと感じた。
- ・自身は「自己の生き方を考える」ということは「人の生き方を知る」ということではないかと考えている。
- ・「橋の上のおおかみ」は擬人化された「おおかみの生き方」を知ることで、その人の弱さや強さ、人としての生き方、自分の生き方を知るということだと感じた。まだうまく言語化できていない部分もあるが今日ここにいる先生方と話しながら考えていきたい。

(三ツ木会員)

- ・人生の意味をどこに求めるかという話が印象的だった。これは全ての人の課題だともいえる。
- ・子どもたちと道徳科の授業をする時は、教師が一つのロールモデルになる必要がある。
- ・また、議論するという事は、子どもたち自身がその必然性を見出せなければ議論はできないと考える。
- ・考えを深めるために、自分にとっての必然性と、知的好奇心が揺さぶられるような視点が必要だと感じている。

(仲川会員)

- ・学習指導要領に描かれていることの大切さを改めて確認しながら聞いていた。
- ・印象的だったのは ICT 機器を文房具のように使うということである。
- ・ICT 機器に限らず、教科書ノートといった文房具を出すことの指導から行う現状もある。
- ・まずこれらの文房具の使い方からきちんと指導を始める必要がある。
- ・改めて「自己の生き方」と言っているのはいろんな研究会でも言われていると感じる。
- ・子どもをはじめ人間には「よりよくなりたい」「よりよく生きたい」という希望があると思う。今より「ちょっとでもいい人になりたい」「よくなりたい」という気持ちを引き出せせるような指導を学校でしていきたい。
- ・多面的多角的、人の話、教材から学ぶ中で、子どもたちができるだけ先生に向かってではなく、友だちにむかって話をできる授業づくり、学級づくりをしていきたい。あの子に話を聞いてほしい、あの子の話を聞きたいという意見を引き出したいと思うような授業を作りたい。

Q 「自己を見つめること」について具体的にどのように捉えていますか？

(吉野会員)

- ・「自己」と「自分」は何が違うのかが気になる場所である。
- ・「自分」は表面的、「自己」は「自分が気付かない深い自分」ではないかと思っている。
- ・「自己を見つめる」というのは時間軸があると感じる。過去、今、未来を見つめることで自己を見つめることができるのではないだろうか。

(吉田会員)

- ・話を聞きながら自分も吉野会員の考えに近い所があると思っている。
- ・夏休みに自身の過去の書類の整理をした時に、過去に自分が書いた文章から、現在忘れていた気持ちを思い出すという事があった。
- ・「自己を見つめる」というと、つい「今」に目が行きがちだが、改めて過去、今、未来というものがつながっていないと、自己を見つめていけないと感じる。
- ・紛争のある地域の小学校の子どもたち、日本の酪農家の減少など、ニュースなどで様々な人々の立場を知ること、自分とは何かという問いが生まれることがある。
- ・「人の生き方を知ること、自分の生き方について気付かされる」それを工夫しながら授業で子どもに教えていくという事なのではないか。

(三ツ木会員)

- ・「自己を見つめる」というが、自分の経験体験がないと難しい。
- ・大人である教師は、自身の過去を振り返ることができるが、経験自体が少ない小学生には、経験を振り返ることが難しいのではないか。だからこそ、疑似体験や「人の生き方から学ぶこと」が大きな意味をもってくる。
- ・自分の経験体験を思い出しながら、そこに友達の姿や言葉、行動を加えたりしながら自己内対話をしていく。
- ・言い換えると、友だちの話を聞いている時も自己内対話はしているともいえる。
- ・善と悪の道徳的判断をしながら、しっかりと「自分の軸」をもつことが大切なのではないかと感じる。

(仲川会員)

- ・「自己をみつめる」と言葉で言うのは簡単だが、それを理解するというのは難しい児童もいる。
- ・毎回の道徳の時間は「自己を見つめる」チャンスだともいえる。
- ・内容項目に照らし合わせて、「こんなことを考えている」「こんなことをしてしまった」という今の自分について考え、教材を見て、友だちの意見を聞いて、「だからこんなことをやってしまったのか」「いや、やはりそんなことはしないかな」と振り返ることができる45分間時間にしたいと考えている。
- ・子どもたちには「道徳科の授業は心をチェックする時間だからね」と伝えている。
- ・子どもにこのように伝えるとストンと落ちることが多いと感じる。

(堀田先生)

- ・解説には「自己を見つめるとは」自分とのかかわり、これまでの自分との経験、その時の感じ方、考え方と照らし合わせながらさらに考えを深めることが書かれている。
- ・先ほど皆さんが話していることは重要なポイントだといえる。
- ・そのため導入時に、事前アンケートで自分をよび起こすなどの「場の設定」が必要になるのではないか。
- ・今日は「道徳科」の視点にしぼって話したが、日常の「道徳教育」の視点ももちろんある。
- ・年度初めに、どんなことをねらいをもって取り組むかを考えると思う。
- ・年度当初にこの一年間どんなねらいをもって取り組みたいか目標に頑張りたいのか、生活面学習面から生活面から考えると思う。
- ・例えば「友だちとけんかをしない」「意地悪をしない」などそれをもっと意識して、年間の35道徳科授業を考え実施することで、子どもたちの状況を適宜振り返るきっかけにできるかもしれない。
- ・自身の目標をもつことが個別最適な学び、学習の個性化にもつながる。
- ・3学期はじめ、子どもが何か目標をもっている時は、関連のある内容項目に置き換えてみるのがよい。
- ・教師もその時、その子を注目していけばよい。子どもも目標を意識することで、自分の学びの成長も感じることに、今の自分、これからの自分について考えることができるのではないだろうか。

Q3「自己の生き方についての考え方をより深めていくため」にはどうしたらよいと思いますか。

(吉野会員)

- ・今までの話題をつなげると、一つの「ものさし」が必要だといえる。
- ・「より良い生き方」は人によって違う。他者の規準もある。その判断規準となる「ものさし」が必要だといえる。
- ・一つの規準として「その人のロールモデルが誰か」「何をよりどころにしているか」を考えていくことは大切である。

(吉田会員)

- ・「自己の生き方を深める」には子どもたちの「心が動かない」といけないと感じている。
- ・子どもの今までの価値観をひっくり返すような発想の転換が授業には必要かもしれない。
- ・内容の確認や、知っていることの確認ではなく、その考えはなかったと今まで気付かなかった視点に気付ける「心が動く授業」をする。
- ・その場で生まれるもの、そして教師がその言葉をいかに拾って広げられるかがそのやり取りを楽しみたい。
- ・そのためには教師自身が日常生活にあるものに対して、普段からセンサーを張っておかなければいけない。また、教師自身が常に身の回りのものに感動しておかなければいけない。
- ・世の中のものには感動に気付かず流れることが多い。教師自身も感動する心をもつことが大切なのではないか。

(三ツ木会員)

- ・「自己の生き方深める」ためには、教師一人のロールモデルでは足りない。いろいろなロールモデルがほしい。
- ・主人公の気持ちを追っていく授業もたくさんやってきたが、それを取り巻く人たち、かかわる人たちの生き方に注目している子どももいる。それも一つのモデルにしていくことも大切なのだと思う。
- ・子どもたちの背景にある過程を見つめて、それを全て認めて理解していくという事ができれば、子どもたちのより具体的な姿が見えてくるのではないかと思う。

(仲川会員)

- ・質問を聞いてまず頭に浮かんだのが「あきらめないこと」である。
- ・こんなに一生懸命意見にやっていることでも2、3日たつと子どもたちは忘れることがある。
- ・道徳ってそういうところもある。だから繰り返しやっていく。一回習得してすぐできるものでもない。
- ・見えないかもしれないけど、その子の中で上書きされたり、子どもの時は気付かないかもしれないけど、大人になって気付いたりすることもある。
- ・まず指導者が、できない、わからない。変化が見られないとあきらめるのではなく指導を続けていく。
- ・「感動する心」がわからない子もいる。
- ・普段の生活の中でも、道徳的な感じ方や、考え方を感ずる場面があるのではないか。
- ・「これが感動するってことだよ」という事を日常生活の中で伝えることも大切である。
- ・昔の方が道徳的な考え方や感じ方をする場面が多かった。感動するということから日常の中から教えていかないといけないのかもしれない。

(堀田先生)

- ・「自己の生き方についての考えを深める」というのは道徳的諸価値の理解、価値理解人間理解、他者理解。
- ・発問をする時に、価値理解、人間理解なのかとそれぞれ分類して考えていくことが大切である。
- ・まず子どもの実態を、教師が気づいていないといけない。
- ・問い返し返しの意味づけ→なぜその問い返しをしたかという意味づけをする。
- ・小学校で学んだ価値理解、他者理解、人間理解でそれぞれ問い返すことで、自分を見つめられるようにしていく。
- ・個人的な見解であるが、究極は、多面的・多角的に考えるという事について、子どものどうしのやり取りでも子どもの道徳性は養われていくと思っている。
- ・自分の経験が積み重なって、言語化することこそ難しいが、やり取りをする中で、自分がやろうとすることにはっと気付くことがある。

- ・そういったことは、道徳性を養う上で大切なことである。だから多面的・多角的に考える場をしっかりととってあげることが、自分自身を見つめ直す、自分の良さに気付くことにつながるもいえる。
- ・そういったことを大切にすることで「自己の生き方を見つめ、考えを深める子ども」につながる。これはよりよく生きるために大切なことである。

(司会)

- ・より深めていくために必要なもの、他者とのやり時、感動すること、様々な人の生き方から学ぶなどの話題が挙げられた。
- ・価値理解、他者理解、人間理解を実際の授業の中で実践していくとよい授業になっていく。
- ・子どもの心が動かない、質的転換ではなく質的充実における課題も見えてきた
- ・道徳科、道徳教育における現状の課題や改善策などについて、この後も議論していきたい。

Q4 先生方は現在の道徳科、道徳教育にどんな課題を感じていますか。

(吉野会員)

- ・特別支援教育の情緒級の担任であるが、道徳科の授業は難しいと感じることがある。過去の自分、内容理解、表現が難しい。授業をきいてもなかなか響かない場合がある。
- ・複学年、混合授業、ソーシャルスキルトレーニング、自立活動的、これは教科としてのねらいと違う。道徳性が育まれるということと違う。
- ・道徳教育はカリマネ、どれくらいどの学校も充実しているかを知りたい。社会や家庭に飛び出した道徳教育という所まで考えていくと、行政などの大きな枠組みが関りも必要ではないか。

(吉田会員)

- ・現場を見ていて感じるのは、まじめに一生懸命授業をやる人は多い。しかしやり方だけを「こなす」だけの授業になりがちである。
- ・それ以上にその一時間の中で、子供や教師の気持ちが変わる授業をしていくことが大切だと思っている。
- ・子どもや教師がこういう風になりたい、こういう風にしたいと思うような本当に感動する授業をしていく必要がある。
- ・先ほど、カリマネのことが話題になったが、いい授業には子どもの実態や家庭等カリマネの要素が自然と含まれていくのではないか。
- ・授業には、「親切とはどんな場面があるか」といろいろな場面を考える大喜利のような視点と、また子どもが言ったものをどのように内容項目と関連付けるかというなぞかけに近い視点があると感じる。

(三ツ木会員)

- ・自分の思いや考え、意見が言えない、ただそこにいるだけのお客様になるような授業ではいけない。
- ・道徳は、心が動く内面の課題が大切だと言われる。自分が経験したこと、誉められたこと、自分にとって必要なことなどの経験知がある子ども、自己肯定感が高い子どもは豊かなイメージがわいてくると思うが、子どもによって背景が違うので、その点も授業を工夫する必要がある。
- ・自分だったらどうするのかを考える、自分ごとで考えることは大切だと思う。
- ・いろいろな手立てがある中で、子どもが「楽しい」と思えることが何より大切。一生懸命考えても、できないという自分の弱さを知ったり、モヤモヤしたりすることも大切だと思っている。

(仲川先生)

- ・課題と聞いて「教科書のこと」がまず思い浮かんだ。授業そのものがやりやすくなったと感じる。
- ・教科書があって、その後ろに発問例がある。でもその前に子どもの実態がある、今日の節度、節制を考える時にそれでよかったのか。教材に悩むことはなくなったが、この指導例の中から、自分にとって必要なものを教師が選んでいく必要がある。
- ・また現場では評価をすることに頭を悩ませている、授業で振り返りを何か残しておきたい、「評価のための振り返り」になっていないかというのが気になる。

(堀田先生)

- ・道徳科教育という視点でお願いしていること、カリマネの視点で考えると、校長のグランドデザインを全職員が共有しているかという事を考えてほしい。
- ・まずはグランドデザインを全クラスが共有する。重点目標は何か、重点内容項目これを意識できてしていないと、授業でも、子供や教師の実態が反映された授業ができない。目の前の児童に合わせた発問、や授業構成にしないといけないと必要な手立てを講じられない。
- ・まずは道徳教育の全体計画を見直さないといけない。
- ・実態実情を踏まえた学校の特色ある年間指導計画を作っていくってほしい、そうすることで授業をしながら、自分自身を深く見つめるような道徳科授業になる。

司会：ここからはフロアからも質問感想をいただきたいと思います。

(フロア 感想)

- ・自分も子どもたちと楽しみたい。子どもの「いいな」と思うセンサーももつことで、もっといい授業が増えていくのではないかな。
- ・話の中で、道徳授業はなぞかけ、大喜利という話が印象的だった。
- ・自分だったら子どもと話しながら「え、それってどういうこと？」子どもたちと掛け合いをするように授業をしたい。

(参会者 質問)

- ・「自己を見つめると」というテーマであるが「メタ認知」「俯瞰力」が今の子どもたちに不足していることが大きく関係している気がする。
- ・中学生女子だと、自分も同じようなことに人にやっているのに、人のからされたことに神経質になる子もしばしばみられる。メタ認知が付けば、解決していけるのではないかな。
- ・「自己を見つめ直すような」内容が書かれている内容項目は家族愛などくらいで、ほとんどない。道徳科でメタ認知や俯瞰力をつける方法などあるのかな。

(吉野会員)

- ・感動という要素とはひとつ大切な要素だと考える。
- ・「こうすけ君のアサガオ」という教材で、二つの手立てを講じた。
- ・NPO法人に連絡して、実際にこうすけ君が育てたアサガオの種をもらって育てた。
- ・また授業参観の時に、保護者から手紙を送ってもらった。
- ・二か月間水をあげて花が咲いた写真も撮ってくれた。その手紙をもらって泣いた子がいた。
- ・しかしこれは認知的なところも大きいので子どもによって、そういった手立てが合う子も知ればそうでない子もいる。そこにあてはまらない子がいる難しさもある。

(吉田会員)

- ・メタ認知として一つ思ったのは道徳教材を構造的に読むことが大切ではないか。
- ・登場人物、シチュエーションではなくこの話は結局、何を伝えたかったのか、どんな親切の形を紹介している構造だったかを捉える。
- ・振り返りの時にさらにその構造を使った別の例を考える。構造的に見つつ、構造と振り返りでメタ認知能力はついていくのではないか。
- ・自分の例、人の例を教材と重ね合わせて聞くことでいろんなケースを客観的にみることができる。
教材に入り込みすぎないように、構造と具体と教材を行き来することでメタ認知力は身についていくのではないか。

(三ツ木会員)

- ・ある教材を扱う時に主人公だけでなく、周りの人がどんな気持ちかも考えていきたいという子どもがいる。
- ・中学校教材で「銀色のシャープペンシル」で、主人公が「そうだ、謝りに行かなきゃ」と友人宅に向かう役割演技を取り入れた。その時、友人宅まではいけるが、そのあと、どうしても謝れない自分がいるという意見が出た。
- ・なぜできないのかを考えていくと、一步踏み出せない自分がある事実と謝った後友人が許してくれるのか確信が持てないからだという。
- ・多種多様な人々がいる社会を生きていくうえで、友だちとの意見の違いを知ったり、こういう場合はどうするんだろうと話し合ったりすることはこれからより大切になる。
- ・良いことは分かっているが、そこから一步踏み出せない自分があるのも事実なのかもしれない。自分自身はどうするのか、どうしたいのかと自分自身を見つめることが大切だと感じた。

(仲川会員)

- ・道徳の時間が学級で充実していると、いろんな授業が変わってくる。
- ・自分の思いを受け止めることができる土壌ができると、いろんな教科で意見交換が活発になって、授業そのものも豊かになってくる。
- ・その道徳科でできることとしては、言って、受け止めるだけではなくて、「ああそうなんだ」「ちょっと違うな」という反応や、自分と他者との違いを認め合える雰囲気や空間ができれば、それを積み重ねていくことで子どものよりよい成長につながる。

(堀田先生)

- ・メタ認知、俯瞰量は自分自身の認知、日々の道徳科の授業でも意識していればできる要因なのではないか。
- ・相互理解寛容でも、教材だけでなく社会や公共の場に広げていくことが大切である。
- ・OECDの東北大学で行われたジャパンセミナーに高校生が登壇した時に、今教師に求めているものを高校生に尋ねる場面があった。
- ・一人の生徒は「柔軟性」と「笑顔」と答えた。
- ・これを聞いたとき感じたのは教師のメタ認知力が求められているという事だと思う。
- ・そのようなメタ認知力をもって生徒に接することができれば、生徒の新しい情報を見ることはできない。教師も俯瞰力をもって子どもと接しないと意味がないし、子どもの俯瞰する力もつかない。

(参会者 感想)

- ・自分は学生であるが、本日参加して、表面だけの道徳の授業ではなく、今の道徳は生まれて初めて受けているような気持ちになった。
- ・メタ認知は難しいと思うが、就職などにおいても、自分を見つめてくることが大切だと感じた。参加して大変勉強になった。

(参会者 感想)

- ・今年度の神奈川支部テーマを4月も決めて、どう実践していくかも考えながらやっていた。
- ・メタ認知が大切だと感じている。
- ・「自分を振り返る時間」をどうするか。時間軸の「未来」についてこれまでも考えることが多かった。
- ・自分過去も振り返らないと感想は書けない。しかし過去の失敗を振り返るつらいこともあるのでその加減も大切になってくる。
- ・教材に書かれている出来事とその子にとって必要感があるかが大切。
その時に自分の発問と問返しをする中で、子どもたちが今案で問あげたことがないような発問ができるといいなと思っている。
- ・やはり正解はわからない、この大きなテーマについてはこれからも考えていきたい。

Q 最後に登壇者の先生方から一言ずつお話をいただけたらと思います。

(吉野会員)

- ・本支部の「自己の生き方」中高、大人になっても考える、今現在考えているこれからどうしていくか、それには今までの自分が大切である。
- ・どうしてもしても自分だけでなく他者と生きる事が大切。だからこそ子供と一緒に考えるということの大切さを再確認できた。

(吉田会員)

- ・最初に皆さんと対話を楽しみたいと言った。話しながら、自分が考えていたことを話すのではなく、言われたことを聞いて、生まれたものを率直に言いたいと思った。
- ・話を聞いてフロア、登壇者の方の話を聞いて生まれたものを話した。この80分で自分自身が少し変わっていった。これを道徳の授業でやっていきたい。子どもたちと子供と生まれるものを大切にしながら、自己の生き方について考える授業をしていきたい。ありがたい時間だった。

(三ツ木会員)

- ・自分自身も人生の意味、自己の存在価値を考えることがある。
- ・子どもたちと一緒に話をしながら、どれもが素敵なかげがえのない人生なのだというような道徳の授業ができたらよいと思っている。

(仲川会員)

- ・昨日参観したある授業の中で、子どもが自分の弱さと向き合って、自分の気持ちをかえたという感想をクラスで紹介した時、クラスの子どもたちから歓声が上がって終わった。
他者の存在ロールモデル、インタビューした、こどもをよくみて、今日はこの子を見たい、それを教室の中で認め合えるそんな授業したい。
- ・友達の意見を大切にしたり、価値づけたり、認め合うことで暖かい道徳授業ができる。

(堀田先生)

- ・教師の学びは子どもの学びの相似形で合ってほしい。学ぶことがたくさんあった。子の学びの感覚、道徳科の事業を始め、授業で現れてほしいと思っている。
- ・子どもたちもきっと同じ感覚なので、そういった感覚を教師も子供も学び合う感覚を持つ。
そうしていくことで道徳教育も素敵なものになっていくと感じている。

「自己を振り返る」というテーマについて、会場の先生方と様々な視点から考えていく事ができた貴重な時間でした。

自己を振り返る際、「マイナス面だけではなくプラス面も」、「先のことばかりでなく、今までの自分も」…

これからも、子どもたちが「人生をいかに生きるべきか」について考えていけるような授業をしていきたいと思いました。

当日は沢山のご質問や、ご感想、熱い議論に刺激を受けました。ありがとうございました！

(この内容につきましては神奈川支部ホームページにも掲載されております。)

<http://www.doutokukanagawa.com/>